

令和5年度 第4回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日時 令和6年1月23日(火) 午後1時30分～午後3時00分
- 場所 市役所南庁舎7階 南73委員会室
- 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員](敬称略 50音順)
- 江里口あけみ (榊塚西町ささえ愛隊 副代表)
- 大岩由治 (とよたシニアアカデミー 事務局長)
- 大山昌史 (市区長会 理事)
- 鬼木利瑛 (株式会社 eight 代表取締役)
- 小宮山利恵子 (株式会社リクルートスタディサプリ教育 AI 研究所 所長)【副会長】
- 近藤 悟 (地域学校共働本部推進アドバイザー)
- 坂元玲介 (とよた多世代参加支援プロジェクト 会長)
- 戸田友介 (株式会社 M-easy 代表取締役)
- 古澤三秀 (市民公募)
- 牧野篤 (東京大学大学院教育学研究科 教授)【会長】
- 三ツ石靖子 (豊田市市文化振興財団 交流館課 主任指導主事)
- 欠席者 古川由香 (市民公募)
- 事務局 八木健次 (生涯活躍部 部長)
- 森 泰通 (生涯活躍部 副部長)
- 小澤真里 (市民活躍支援課 課長)
- 和出広樹 (市民活躍支援課 副課長)
- 堀田真悟 (市民活躍支援課 担当長)
- 竹内祐衣 (市民活躍支援課 主査)

次第

1 開会・あいさつ

2 議事

「人生100年時代における学びのあり方と方策」

・最終とりまとめ(案)について【資料1】

3 閉会

1 あいさつ

A 委員:

今年の辰年の幕開けが大変なことになっている。1月1日に能登半島沖地震が発災してもう3週間。それから2日に、羽田空港で事故が起こった。私も毎月数回は羽田空港を利用しており他人事ではなかった。犠牲になられた方々のご冥福をお祈りしたい。それから被災者、被害者の方々の一刻もはやい日常生活の回復をお祈りしたい。

生涯学習は、発災は防げないが、災害の二次被害や、被害を抑えること、特に避難所経営をどうするかといったことに関わるとても重要な役割を果たすのではないかと。特に人々の結びつきをつくっていくことが、いわゆる災害関連死を防ぐことにも関わってくる。それから、72時間以内といわれるが、早期発見にも関わる。今後、人々の繋がりがあり方が問われてくるのではないかと。今回被害の状況がまだよく分かっていないところがあるが、孤立した集落がたくさん出たこともこれからの社会の一つの象徴という感じを受ける。特に少子化、人口減少、高齢化しておりすぐに動けない地域がたくさんあるのではないかと。それからライフラインが中央集中型になっており、従来であれば人が通りものが運べたが、発災後は道路が寸断されて車が通れず、救援物資が届けられない状況も多々あると聞いている。やはりいろいろな形で分散型社会も考えながら、人々の繋がりをどうするのかといったことも私自身考えなければいけない。

少し重い話になったが、生涯学習審議会、今日は最後の会議となる。そして今日最終とりまとめ案が出てきているため、皆さんの方で改めてご議論いただき、最終的に市長の方にお渡しできれば、よろしく願いいたします。

2 議事

<意見交換> ※要約

- 【資料1】「人生100年時代における学びのあり方と方策」中間とりまとめ(案)

事務局

* 資料に基づいて説明

A 委員

ただいまこちらの最終とりまとめ案について特に修正点を中心にご説明いただいたが、委員のみなさんの方から、改めて最終とりまとめ案について、不足している観点や表現、カテゴリについてご指摘や、ご質問ご意見等あれば、お願いしたい。

B 委員

最終的に掲載、公表されるのは最終とりまとめ案だけか、それともスライド版も一緒に掲載されるか。スライド版も拝見した方がいいか。

事務局

スライド版も掲載する。スライド版の中身は最終とりまとめ案を反映しているが、小さいところも含めて気になるところがあれば教えていただきたい。

A 委員

スライド版の説明を事務局からお願いします。

事務局説明

* 資料に基づいて説明

C 委員

1点目、資料に反映してほしいということではないが、学びとコミュニティを中心に、地域での繋がりなどの議論をしてきたが、コミュニティ組織がどんどん弱っていることに対してどう補っていくのか悩ましい。例えば、旭地区は、環境美化や祭りを少しずつ縮小しながら何とかみんなで集まってできている。しかし、さらに奥の稲武地区は集まることができなくなっている。環境美化で集まらない地域はそれぞれ家の前の草刈りをやっている。そして祭りもやめようということになってきている。学びは人とのつながりがベースになっていると思うが、繋がることができなくなっている。これに対して、物理的・精神的に人がどう繋がるか。都市部においては、物理的には隣に人がいるかもしれないが精神的には繋がっていないのではないか。

2点目、この最終とりまとめ案の中に子どもの話題がたくさん出ているが、こども園以下の話題がなかったのではないか。実は数年前、私が会長のために、豊田市のこども園の保護者会の全体会をやめた。今まではPTAに入らないといけなかったが、PTAは全国的に任意のため承認を取るという流れの中で、PTAに入らない人が出て、なし崩し的になくなっていく状況にある。保護者会の負担の一つが全体会だったため全体会をなくすことにしたが、今はさらにその流れが進んでいて、各園の保護者会もなくすという話になっている。これは時代の流れとして仕方がないが、実は、保護者の会、こども園がこういう政策にあまり位置づけされておらず、大人、親の都合、市や園の都合で、議論をしているのではないか。園の運営は、園長先生や先生の異動もあるため変わることは仕方がな

いが、市として、コミュニティ組織が弱くなりサービス化する中で、子どもたちの学びと育ちを中心に置いた場になっていけるのか気になっている。

A 委員

2点話があった。一つは繋がりが大事だということ。繋がることで学びがあるという論理になっているが、特に過疎化や高齢化の中で、繋がることができなくなっている状況をどうするか、どう捉えるかということ。もう一つは、こども園以下、いわゆる乳幼児を位置付けてきたか考えると、そこまで議論できていなかったのではないか。学びを考えると、どこに焦点を当てるのか、または何を軸にするのかといったことが問われたのではないか。

D 委員

まず、最終とりまとめ案全体の感想として、素晴らしい。繋がり合い、学び合い、自律的に自分の人生をデザインしていくことが、地域の豊かさになり、周りの人たちも幸せになっていくということが表現されていて、よい街になるという実感を得られる。

つぎに意見として、1点目、学び合いという言葉の位置付けが気になった。スライド版9～10ページの図に学び合いが書かれていて、最終とりまとめ案にも、第8次総合計画で学び合いを重要な視点として位置づけていると書かれているが、あるべき姿、望ましい姿の中に、学び合いが出てこない。

2点目、最終とりまとめ案15ページ、スライド版9ページの、学びの視点10項目について、順番、カテゴリが気になった。例えば、1～3番は学び方、4～5番は学びを生かすこと、9～10番は誰が主語なのか分からないため、項目として残すとしても、記載順の工夫が必要ではないか。

3点目、4つの施策について、学びの視点に対応しているのではないか。望ましいあるべき姿があり、学びの視点があり、それに対応する形で施策があるという形で、もう少し整合性、一貫した繋がりを持たせて整理されるとわかりやすい。整理されると、C委員の発言のような、抜けている視点に気づけるのではないか。

4点目、資源として、ヒト、コト、モノの視点を書かれているが、そこに「情報」を加えたらどうか。SNSを使った発信やDX、今後作成されるか分からないが学び情報の集約サイトなど、そういったことが強みになっていくな情報を加えたらどうか。ただ、これ以上の情報を入れるとややこしくなるかもしれない。

5点目、学びの視点の⑤学びの可視化と自己経営について。これまでの議論でも大変重要な視点。最近では学習歴をブロックチェーン（改ざん不可能な分散型台

帳ともいわれ、取引履歴を一本の鎖のように連結させ、データを管理する技術)などで資産にしていく動きもある。学びの視点の可視化の手法として、デジタル技術を生かしたものがあるとよいのではないか。

A 委員

一つ目は学び合いについて。最終とりまとめ案の10ページに、第8期総合計画に位置付く考え方として学び合いが記載されていて、スライド版でも学び合いが核になる表現がされているが、文章の中にしっかり位置づいていないのではないかというご指摘。今回の最終とりまとめ案は学び合いをベースに作られているのだろうが、文章の中で展開されていないのではないかということ。

二つ目は、学びの視点が並列になっていて、構造化されていないのではないか、誰が主役なのか主体なのかといったことを整理したらどうかということ。とくに9~10番について、行政的な視点かと思うが、少し唐突に感じるということ。

三つ目が、具体的な方策の4つの取組みについて、因果関係ではないが、全体を構造化するとよくわかるのではないか。そうすればC委員の発言のような、この視点が欠けていたということも見えてくるのではないかということ。

E 委員

まず、生涯学習はなかなか日常生活の中で見えない。例えば、交流館の名前を生涯学習交流館にすると、生涯学習の拠点として、生涯学習が日々市民の皆さんに見えるのではないか。生涯学習の核はいったい何か、拠点はいっぱいあるがそれがどう繋がっているのか、なかなか一般市民に見えにくい。

次に、情報の発信や見える化について、D委員のデジタルの話、C委員のコミュニティの話もあったが、地域、隣家との関係がなかなか希薄になっている。回覧板すら手渡しではなく回覧日を書いてポストに入れるだけ。これはアナログコンテンツのやり方。今、国がギガスクール構想で、小学生に一人1台タブレットが渡っているような時代に、まだまだ地域の中ではアナログ。広報紙も情報がたくさん載っているが中身がなかなか見えにくい。提案として、自治区はなかなか難しいと思うが、回覧板などを、デジタルコンテンツを掲載できるタブレットに変える挑戦をやっていただくとよい。それを使って、高齢者のデジタルデバイスも解消できるのではないか。使い方が分からなければ、子どもたちと教えることでより身近になる。回覧するときも、タブレットは簡単にポストに入れられないから、手渡しをして会話のきっかけになる。私の組でも今までは新しく引っ越してくる人がいれば懇親会をやってしたが、それもやめてしまった。とにかく会話がな。街中でもそういう状況だから山間部はもっと会話がなのではないか。これを解消する手段として、デジタルコンテンツを使ってもよい。す

ぐに全体に取り入れるのではなく、一部の地区で挑戦をする。そうすると高齢者も様々な情報を見るのではないか。今は、回覧板をいかに早く見て回すかしか考えていない。中身も子ども会の廃品回収や赤い羽根募金だけがすぐに回ってくるという現状。デジタルコンテンツで生涯学習の情報を出していけば、意識が高まるのではないか。

A 委員

生涯学習というのが一般的にはまだ十分理解がない。非常に曖昧なぼやっとしたものであるため、どう理解してもらうか。それから結びつきについて、例えば、回覧板が回されるが機能していないのではないか。回覧板をタブレットにして、手渡しでしっかり見てもらうということもこれから必要になるのではないか。生涯学習や結びつきをつくることに関して、市民の皆さんが関心を持つような施策が必要になるのではないかというご指摘。

タブレットに関して、国のデジタル田園都市国家構想で、ある自治体といくつか関わっている。よくあるのはアプリを製作してタブレットやスマホに入れて使ってもらう事例。高齢者はなかなか使えないため、ある自治体は、一軒一軒回って使い方を説明し、その中で日常生活の困りごとの情報を得てサービスを取り入れる。アプリには、健康管理ができて、体を動かす体操が入っている。そこに生涯学習の情報が入るなど、日常的に見てもらえるようなアプリに変えて、使えるようになるまで寄り添う形で普及をする。そうしたことが、例えば交流館を基本に広がっていくということのをこれから考えられてもよい。

F 委員

学び合いについて、第8次総合計画のどの部分に示されているのか、実は数日前に事務局に確認した。総合計画では、目指す姿や、計画推進にあたりという部分で少しだけ触れられていたが、施策には学び合いは全く書かれていない。生涯学習審議会の最終とりまとめ案でも、総合計画で学び合いが重要な視点として位置づけられていると書いてあるが、実際に各部局が学び合いをどう捉えてどう施策に取り入れるかあまり見えなかった。学び合いが達成できるように、ぜひ具体的な施策の中にそのキーワードが入るとよい。

学び合いそのものに関してはしっかり定義づけされており、よく理解できた。ただ、学び合いと聞くと、教え合いやみんなで学ぶという学校教育、教室で生徒がまだできない子に教えていくようなイメージが一般的ではないか。D 委員の発言にもあったが、施策の中に学び合いが具体的に入る形で推進できるとよい。

A 委員

学び合いに関して、第8次総合計画にも出てくるが、全体の中にしっかり位置づいて構想の中に入っているか上手く読み取れないのではないか。ただ、生涯学習審議会で大事なこととして取り上げたことはよいことであるため、もう少し具体的に施策の中で記載したらどうかということ。それから、学び合いは曖昧なため、一般の方は学校教育的な、お互いに勉強しましょうという捉え方になるかもしれないが、もっと広い概念で学びが使われているので、もう少しわかりやすく施策の中に入れられないかというご意見。

G 委員

具体的に施策の中で記載しては、という発言があったが、豊田市内の様々な部分を網羅しなければいけないと考えると、方策においても具体的に示さない方がよい場合もあるのではないか。

地域コミュニティや交流館、学校共働本部の学び合いによる課題感や生きづらさによる課題感は、地域に入らないと見えてこない。C委員の発言にもあったが、街中と山間部では課題感もまったく違う。とよた多世代プロジェクトとして地域課題解決に取り組んでいるが、山間部のプロジェクトは山間部の人と街中の人をつなげて一緒に課題解決をしないとなかなか難しい。

また、福祉の立場でいうと、高齢者は書いてあるが、障がいのある方や生活に困窮している方の学びをどう捉えるかという視点がなかなか読み取りづらい。障がいをもって生まれた子どもたちにとって、学びとは何か。その子が教えてくれることもあれば、その子が学ぶこともあるという意味で、学び合いは良い言葉。そういった視点がもう少しあるとよい。

最終とりまとめ案18ページの、学びを生かす機会と地域活性化について、交流館や地域学校共働本部が中心になってくるだろうが、そこだけではうまくいかないのではないか。具体的にどこのセクションが何をやっていくかわかりやすいような表現にしておいた方がよいのではないか。交流館などの中間支援拠点において、地域や人をつなぐことができる人材の活用が求められますという表現でいいのか、もう少し具体的に総合計画では記載できた方がよいのか。令和6年度以降、より確実に実施しやすい方法が望ましい。

A 委員

全体としてはこれでよいのではないか。特に市全体のことなので、具体的に書くとかえって制約になる可能性もあるのではないかということ。その反面で、いわゆる社会的な弱者、福祉、特に障がいをもった子どもたち、そういう視点が足りないのではないかというご意見。私の方でさらに加えると、障がいをもった方々や外国人、社会的な弱者といわれているような、少数者に対する配慮がもう

少しあっても良かったのではないかということ。さらにいくつか具体的な策が書かれているが、今後の展開を考えながら文言を考えていくとより良いものになったのではないかというご指摘。

これは国もそうだが、計画などに書き込んでおくと、例えば予算措置を取りやすくなる、逆に予算が取れないと行政的に動けないということもある。そういう意味で少し配慮しながら、しかし具体的に書き込んでしまうと今度それが予算をとるときの制約にもなってしまふ。それぞれの現場や行政の部局で使いやすい文言に整えたらどうかということ。

H 委員

1点目は、D委員の発言で、ヒト・コト・モノに「情報」を追加するという視点が良いと思ったため、事務局がどう捉えているかお聞きしたい。

2点目は、人と人の繋がり、どこか集まる場所が提供されていないとなかなか難しい。地域の拠点である交流館は中学校区に1つしかないため、やはり地域の拠点は学校ではないか。そこで、学校の教育活動は午前8時から午後5時までだが、建物は午後5時以降もある。学校は、セキュリティや不審者の問題などがあり、ある事件をきっかけに学校は必ず門を閉めないといけないためなかなか難しいが、いろいろ工夫をして学校をもっと身近な人が集まって学び合いができる場として提供できないか。

A 委員

情報について、事務局の方で何かお考えがあればお願いしたい。

事務局

情報について、審議会を議論するにあたり、AIの加速化などデジタルは付き合っていくものとして議論を始めたと思っている。文書の中でしっかり見える化できるように書きぶりについて改めて検討していきたい。

A 委員

交流館の活用の仕方、学校施設の問題についてご指摘いただいた。学校と社会教育の連携、学校と社会教育の融合などは昔から議論されている。コミュニティ・スクールについても、もともとは学校を開放し子どもたちを地域で一緒に育てようという議論があったが、様々な実践の課題の中でやはり学校の中で子どもたちを育てるという議論になってきており、なかなか難しい。中学校区に1館ある交流館と小学校との関わりをどうするかも、今後検討する必要があるのではないかということ。

H委員の発言に関連して、ほかの自治体での事例を紹介する。教育行政、特に学校教育は4層構造になっているという議論がある。国、都道府県、市町村、学校の4層構造となっていて、国が政策をつくり、都道府県が教職員の財政負担をし、市町村が小中学校の建物を建て、学校が経営する。学校の先生は、都道府県の職員。そして市町村が建てた建物を使って学校がカリキュラム経営をしている。国はそれに対して、教職員の財政負担を国庫負担で三分の一出している。逆にこの構造を逆手にとりながら、学校に市町村が建物を貸出していて、午前7時以前と午後5時以降は学校ではなくると解釈をしたらどうかという議論がある。新たに公民館やコミュニティセンターを作るよりは、学校施設は全国にあるから、午後5時以降は市町村の市民が使う施設と解釈する。ただこれは学校の設置基準や補助金の問題もあってそう簡単にはいかないが。こうした事例にあるように、人口減少や財政難の中で建物の整備が大変になってくるため、学校施設の活用の仕方や、住民の方々の関わりのあり方も、今後またどこかで検討されてもよい。

I 委員

全体としてよくまとまっているが、横文字が多い。新聞の記事は中学校3年生が理解できるような内容で書いていると聞く。この資料は中学校3年生が読んだときにどうか。

私は資料の中で、いわば生きていくことそのものが学びというフレーズが一番印象深い。生涯学習審議会の委員に推薦していただいたときに、どんな審議をするのかと思っていた。私たちの世代は特にそうかもしれないが、学習や学びと聞くと、知識を増やすことや勉強、学校教育をイメージしてしまう。そうではなく、遊び、仕事、近所づきあいなどそういったもの全てが学びに含まれるということが、もっと市民の中に浸透していくとよい。絵に描いた餅というと大変失礼かもしれないが、行政の政策は、文章は立派で素晴らしい。こんな内容だったら良いまちになると思うが、現場の声をいかに拾って具現化して政策に繋げられるか。市民がこれを目にしたときに、納得はするけど、果たしてやれるのかと感ずるのではないか。豊田市は全国的にも裕福な街だと昔から言われてきている。自動車産業を中心に発展してきた財政も豊かだが、昨今、自動車の生産・販売などいろいろなものが中国に先んじられている。豊田市も今までの体制を変えていかなければならないのではないかと。市行政も変わっていただきたい。

コミュニティの方は、私たち区長会長も交流館を中心にコミュニティ活動、様々な催し、講演、サークルなど、館長と連絡をとりながら一生懸命やっているが、自治区に対する市の要望や依頼事項が年々増えていて、なかなか手に負えない。加えて、PTA、子ども会も役員負担が強いため解散。役員をやる人を探す

のではなく、やる人がいないから解散している状況。私の集落でもそういう声があって、大変な思いをしている。まちの役員をやる人もいなくなってくる。そういう状況の中で、行政が地域にあれこれ依頼してきても、現実には受け入れられない部分もたくさんある。そういった負担のことも考えて政策を考えていただきたい。

A 委員

国の文章でもウェルビーイングなど横文字がたくさん出てきて、私もよくわからないときがある。やはり子どもが読んでもわかるような表現も必要ではないか。とくに中学生ぐらいでわかるような文章にする必要があるのではないかというご指摘。

それから社会の従来の様々な組織のあり方が変わらざるを得なくなってきた中で、どのような地域の結びつきを考えていくのか、つくっていくのかを検討せざるを得なくなっているのではないか。従来の地縁組織、町内会や子ども会、PTAなどをベースに考えることがよいのか、それとも違う組織のあり方で新しい社会の方向性を考えていくのかが問われているのではないかということ。

J 委員

この最終とりまとめ案について、どういう着地点になるのかと思いながら会議に出席していたが、美しく綺麗にまとまったという印象。これを誰が見てもわかるようにという発言があったが、それは正直難しいのではないか。このとりまとめ案は、交流館や各部署が施策を考える道標のようなものではないか。私たち交流館は、これを見て交流館がどうしていくのか、何に取り組んでいくのか、重点的に何をするのか考える羅針盤として受け止めている。

交流館は生涯学習、地域の拠点施設としてやってきたが、改めてそれが大事だと認識をした。社会の変化に応じながら、学びは学校教育だけではなく学び続けるものだということをあらためて大事にしたい。そしてこれからもそれが大事だととりまとめ案にも書かれている。今後人生100年の中で交流館がどうあり続けるのかを解いていただいたと受け止めている。

A 委員

羅針盤としてこれが出ることが大事ではないかということ。豊田市は各中学校区に大きな交流館があり、地域の住民の方々も使っていて、ある意味では自治の拠点にもなっている。自治の拠点としての今後の交流館のあり方についても、影響を与えるようなものではないかということ。

K 委員

この会議を通して「人生いつでも勉強だな、どこにでも学ぶことは落ちているな」と感じた。移住したいまちナンバーワンのまちを見ると、小学校の中にコミュニティがあるところが多い。私も実は、浄水地区の中学校と交流館の複合施設を見学した。これが発展して広まると良いと思っていたが、コロナ禍で進まなかった。地域の方がどなたでも立ち寄れる場所があることは大変素晴らしいことなのでそれが進んでいくとよい。

A 委員

学びはどこにでも落ちている。どう気付くかどう拾うかということ。学校も含めて地域の方々が気軽に立ち寄って話ができる場所があるとよい。そうしたことが学びに繋がり、生活をするそのものが学びといったことに繋がっていくのではないか。それが生涯学習の今後の一つの大きな方向性でもある。これからしっかりと考えていけるような街になればということ。

残りの時間で、各委員からこれまでの審議を通した感想をお願いしたい。

～生涯学習審議会について感想～

G 委員

とよた多世代参加支援プロジェクトとして今回参加させていただいた。別の顔としては、会社の経営、起業家のサポートもしているが、様々な視点の中で学びをこれだけ深めた議論をしたことがなかった。この経験が自分の会社の経営計画にもかなり反映されている。会社経営は、どちらかという売上を上げて、利益を残して、社会に価値のあることをやるイメージをしていた。しかし社会に必要とされる、地域に必要とされる会社は、給料が高いということではない。お互いに学び合える環境が揃っているところに人は自然と集まる。そこに金銭的な報酬や、人という財産の報酬もあるということなのではないか。個人的には大変勉強になったので感謝したい。ここで経験したことを、様々な活動に生かしていけるように、自分自身も活動を止めずに頑張っていきたい。

D 委員

G 委員と同じで、自分の活動にリンクして学びが深まった。A 委員から様々な実践事例や考え方を学ばせていただき、B 委員から新しい学びの視点をたくさんいただいた。委員の皆さまのご意見からも、高齢者を一括りにしてはいけないとか、実感も大事だがやはり共感だとか、一つ一つの皆さんの考え方に触れることで、私の頭も柔らかくなり、いろいろな視点が生まれた。私自身も自分の子育て

てや会社の経営、地域への貢献などに学びを生かしていきたいとモチベーションが高まった。

最終とりまとめ案についての意見だが、1点目、先ほどG委員の発言で、障がいをもつ方、外国人など、この文章の中にインクルーシブ（包摂）の発想が足りなかったと反省している。まだ間に合うのであれば、全ての世代が活躍するという表現について、世代というよりは誰もが、包括的にという表現にしてはどうか。G委員の発言のとおり、学び合いの相手は、健常者、日本人、同じ世代だけではない。外国人や障がいを持つ方からも学べる。もっと言うと、豊田市には自然がたくさんあるため、学び合いの相手が自然ということもあるのではないか。

2点目、子ども会、PTAについて、私自身も子どもが小さいときに、こんなに忙しいのになぜ強制的に役割を担うのだろうと思ったこともあった。ただ、今回の災害のようなことがあると、長期的に見たときに、回覧板を手渡しで渡すなど、近隣にどのような人が住んでいるかわかる仕組みが後から非常に効いてくるはず。とはいえ、やはり地域ごとに地縁組織を作るのはこの時代に合っていないかもしれない。最終とりまとめ案の18ページ、4番目、交流館等の中間支援拠点において、地域や人をつなぐことができる人材についても、地域単位でコーディネーターを作るから難しいのではないか。遊軍のように、どこにも所属せず、様々なところと連携する社会教育士などがよいのではないか。実はコーディネートしたい人はたくさんいるが、学校などに受け入れてもらえない。そこで、市がコーディネーターとして育成して、認定することで、学校や交流館に受け入れてもらえる仕組みをつくってはどうか。このように、遊軍のような存在を育成することも具体的な施策の中に反映していただくとよい。豊田市は山村部の課題、街中の課題それぞれあるが、遊軍としてのコーディネーターが山村部で情報を得て街中に反映する、その逆もできる。SNSなどで情報が広がっている中で、縦割りの弊害があるとしたら、どこかに所属することを辞めてもよいのではないか。

A 委員

一つ目は、ダイバーシティ（多様性）、インクルージョン（包摂性）、エクイティ（公平性）をどう組み込んでいくのかということ。二つ目は、地縁関係や地域組織が今まで強調されてきたが、遊軍のような存在がよいのではないかということ。実は今、エージェントという言い方がある。代理人と訳したりするが、元々はそうではなくて当事者、媒介者のような位置づけ。どこかに所属するのではなく、中山間部と都市部を繋げるようなエージェントがいる、そういう社会がたくさんできてくると面白い。

K 委員

私は皆さんと違って、年寄り代表みたいな気がしていた。よくぞ私を仲間に入れてくださったと思いながら出席していた。年を取るといいこともあるが、皆さんについていくのが精一杯だった。皆さんの実践をお聞きして、こういうこともやれるのだと発見した。

H 委員

それぞれの場所で活躍している人の一流の手法を感じ取って、自分自身もが頑張らないといけないと思った。私は、活動と人をいかに結びつけるかを常々考えている。その中で、活動の企画はできるが、それを支えてくれる人がなかなか見つからない。PTA活動や子ども会、高齢者クラブもだんだんなくなってきている。人を呼び込むために一対一の交渉をしているが、なかなか大変。そうすると、ある組織にお願いして集めるとか、人づてにどんどん輪を広げるとか、新しい戦略を考えないといけない。私は活動の中で、子どもたちに様々な経験をしてもらいたい。今まで聞かせていただいたノウハウや皆さんの経験を生かしながらやっていきたい。

F 委員

前任から途中交代して委員になった。生涯学習審議会は自分とあまり関係ないと思っていたが、委員を受けるにあたって、今までどんなふうに学びをしてきたか振り返ってみた。社会人になって初めてプラネタリウムの建設に携わり、宇宙や天文について勉強しなければいけない事態になった。当時はまだ今のようにネットで調べたりできなかつたため、図書館に通って毎回限度ギリギリの10冊ぐらい本を借りて、期間ギリギリで、返してまた借りてと繰り返していた。今の学びに比べると当時20代だった頃の学びは苦勞したと思うと、今は意外にそんなに苦勞せずに学べる時代になった。しかし、DXの時代なので、だんだんシニアになると、デジタルデバイドになって取り残されるといけないということもある。私はどちらかというところパソコンが出たときには、すぐにネットワークだとかエクセル、アクセスを学んだ。その当時は図書館で借りるというよりは、本を買って本棚にそれが並んでいるのが嬉しかった。学びも時代とともにいろいろ変わる、これからの子どもも大人も、学ぶ環境はどんどん変わるのだろうと改めて感じた。

I 委員

区長として、地域とともにある学校を核とした地域づくり、学びについて考えている。地域にある交流館は、働いたり学んだりいろいろなことをするための支

援の拠点でもある。私はこの3月で区長の任期が終わる。実は、歴代の区長もそうだが、区長が終わると地域との繋がりが切れてしまう。区長をやっている間は、雀の涙ほどの手当てもいただいて、一生懸命やっている。今は、区長をやる人がおらず、後任を探そうと思うと、一対一で誰か探してから辞めるような時代だが、中には区長を辞めてからも民生委員をやったり、保護司をやったり、様々なことで地域貢献されている方もたくさんいる。この審議会は私自身の人生にとっても大きな学びの場になった。この3月以降、役を下りても地域貢献や、コミュニティの役に立ちたい。

C 委員

この審議会のたびに自分の活動とあわせて学びが深まっていく本当に貴重な時間だった。コミュニティ組織が弱っていくことに対して、なかなか難しいという話が出ていたが、一方で、新しい繋がり方、若い人たちで新しい取り組みが出てきている。従来あったものをそのまま残していくことが本当に難しい中で、壊しながら作っていくことをいよいよ真面目にやらないといけない。壊していくことは本当に難しいことでもあるが、全部残していくことはできない。そこに取り残される人がいないようにどう作っていくか、これから向き合っていくかといけないとより深く学んだ。壊して作っていく中で、生涯学習、学び合いという考え方が生きてくるような気がしている。ここで学んだこと、これから学んでいくことを含めて、また地域でいろいろやっていきたい。

審議会では話題に出さなかったが消防団と防災の話。私も何年か後に分団長もやらないといけない。山村部の話で恐縮だが、ある世代だけに頼る防災のあり方にも限界がある。そこを壊しながら地域の人たちと一緒に全員参加でどうやっていくのか。行政の中も縦割り。地域の中でも、地域の区長さんたちと自主防災会と消防団命令系統が全然違うので、実は協力関係だけど協力できない状況がある。従来はそれでよかったが、今はなかなかうまくいかない。それをどう壊して作っていくのか。今後、豊田市の中で、壊し方づくり方の中に学び合いという哲学があるという形でやっていけるとよい。

E 委員

市民公募という形で参加したが、男女共同参画推進懇話会も以前に2年務めていたことがある。生涯学習審議会は小難しく、過去のデータを見て、私にやれるのかと思っていた。私の思いとしては、やはり豊田市民大学がなぜないのか、この一点だけ。その中にぜひ参加して、高齢者というくくりではなく、若い人も含めてみんなと一緒にやれるような場ができないか。

J 委員

繰り返しになるが、私もいろいろ皆さんにご意見いただき、A 委員はじめ委員の皆さんの話を聞いてすごくためになった。それから、審議会のたびに皆さんから交流館というワードをいただき、やはり交流館が地域の大事な拠点施設なのだとして改めて認識した。交流館は28館あるが、どこも建屋が老朽化していて、建物の維持に労力を結構かけている。学びなどソフト面だけに100%の力を出せないのが現状。そういった中でもやはり今までの交流館の取組みも大事にしつつ、これからの世の中の状況に応じた方向転換も必要。これからも頑張っけていきたい。皆さんとも手を携えながら一緒にできるとよい。

B 委員

私は2014年からテクノロジーと教育を専門にやってきた。約10自治体の委員会や審議会の委員をさせていただいているが、学びの本質に関する議論、ここまで深く学び合いの話までは他ではできていなかった。委員のみなさんのお話や、A 委員の解説など非常に私自身勉強になった。

インクルーシブ（包摂）の話について、この審議会委員の構成として、様々なバックグラウンドで年代もバラバラだが、障がいの方がいらっしやらなかったかもしれない。私かわからない障がいをお持ちの方もいらっしやるかもしれないが、目に見える形での障がい、手帳持っている方、性に関する障がいの方がいらっしやらなかったの、その議論の機会が少なかったかもしれない。また機会があれば豊田市の方でそういった方も組み入れていただくとよいかもしれない。

A 委員

皆さんのお話を伺ってそれぞれの皆さんの人生を重ねて、この審議会の議論を受け取っていただけたのかなと思っている。私自身も大学で、生涯学習を専門にしている。皆さんの様々な観点や発言から学ぶことも多く、とても勉強になった。良い雰囲気です審議会が進んだのではないかと。これも皆さんのご協力のおかげ。感謝申し上げたい。

その上で B 委員の発言にもあったが、多様性を考えると、今後、どの審議会もそうだが、様々な方々が入る必要がある。または審議会の場にお招きすることが難しくても、例えばミニシンポジウムみたいなことをやったり、意見を交換する場所を設けたり、そんなことも今後考えられたらよい。

もう一つ、実は気になるデータを持っている。様々なシンクタンク（研究機関）で国際比較をしていて、先日、日本とアメリカとドイツの社会参加に関する意識調査に関するデータをいただいた。データが少ないので結論は出せないが、少しご紹介したい。国際比較をすると日本だけ異なる結果が出ることがよくある。こ

の調査は日米独だが、例えば日中韓や日中米で比較をしても同じ結果が出て、米中が似ていて日本だけ異なる結果が出る。例えば、「家庭の中で信頼できる人がいるか」に対して、「いない」が日本が一番多い。「家庭の中であなたは信頼されているか」に対して、「信頼されていると思えない」が日本が一番多い。「地域で信頼できる人がいるか」に対して、「いない」が日本が一番多い。米独は、「5、6人」の回答が結構いる。「地域からあなたは信頼されているか」に対して、「信頼されていると思わない」が日本が一番多い。「会社であなたは信頼できる人がいるか」に対して、「いない」が日本が一番多い。「職場で信頼されていると思うか」に対して、「自分はそう思わない」が日本が一番多い。「国や社会を良くするには誰が努力すべきか」に対して、「政府」が日本が一番多い。「政府を信用しているか」に対して「信用していない」が日本が一番多い。この結果を受けて、日本は孤立をしているのではないかと。ところが、「あなたは孤独を感じるか」に対して「感じない」が日本が一番多い。他の国は「感じている」が多い。この結果をどう分析したらよいかについて、このシンクタンクも「よく分からない」という結論になっている。

この結果を言い換えると、人間関係がしっかりしていないため孤独を感じないのではないかとということ。孤独を感じるのは人との関係の中にいるからこそ感じるのであって、自分の周りに社会がなければ孤独を感じることもないのではないか。日本人たちは傾向として、社会に生きていないのではないか。そういう見方もできる。ただこれは、ルソーの社会以前の人間のあり方でもあるため、社会を作らないで生きていけるような社会にしてしまったということでもある。実はほかにもこういう質問もしていて、「あなたはこの気候変動に対して、CO₂削減のために何か努力をしているか」「次の世代のために何かしようと思っているか」に対して、「ほとんど何も思わない」「していない」が日本は8割。これは無責任といえてしまう、言い方を変えれば、他人に関心がない。関心がないから寂しくもない。これを肯定的に考えると、お互いにいがみ合ったりすることがあまりない社会ということも言われる。それぞれがお互いに気を掛け合っていないため、気にならないし寂しくもないということ。こういう弱い社会は助け合うことができないかもしれない。

今後、この社会のあり方を考えていくことが、この審議会で皆さんのご議論の中で出てきたのではないかと受けとめている。今回最終とりまとめをお出しするが、これで議論が終わりではなくて、引き続き市民の皆さんの中で議論を続けていかれながらよりよい社会を、皆さんがよいよいと思っている社会実現していくということがこれから求められてくるので、ぜひお力添えをいただきたい。